

アメリカ研修合宿報告

Report on academic trip to Boston and Washington, D.C.

東 咲 絵*, 大野 紗也加*, 大屋 朱里*, 高橋 洋美*,
田中 絵里菜*, 宮田 泰佳*, 伊藤 真理**

Sakie AZUMA, Sayaka ONO, Akari OYA, Hiromi TAKAHASHI,
Erina TANAKA, Yasuka MIYATA, Mari ITOH

キーワード：アメリカ文化 ポストン公共図書館 米国議会図書館 アジア部門

はじめに

このたび、2013年11月1日から11月7日までアメリカ文学関連の街を訪ね、アメリカ最古の公共図書館、および国立図書館を視察する研修に参加した。研修目的は、文化遺産や知識資源のデジタル化等において先進的なアメリカの図書館、博物館を訪問し、アメリカ文学にふれるとともに、先進的かつ伝統的な情報サービスおよびそれを支える文化について理解を深め、これまでの学習を向上させるというものである。

日程は以下のとおりである。

日にち	内容
11月1日（1日目）	ポストン市内研修
11月2日（2日目）	ポストン公共図書館見学
11月3日（3日目）	ポストン北部研修
11月4日（4日目）	ワシントン D.C. 市内研修
11月5日（5日目）	議事堂見学 議会図書館見学

1. ポストン1日目

ポストンはニューイングランド地方に位置しており、アメリカの歴史と文化の発祥地である。そのため、アメリカ史実に関わりがある建築物や場所が多い。また、アメリカの中で最も古い歴史のある建築物が多く建つ。街中も趣深い建築物が多い。

1日目はポストン市内の視察であった。予定では車窓からの見学が多かったが、当日は時間があり、バスを降りて視察することができた。訪問したところは以下のとおりである。

- ・ウォーターフロント地区（車窓）
- ・ビーコンヒル（車窓）
- ・クインシーマーケット
- ・トリニティー教会（車窓）

* 愛知淑徳大学人間情報学部

** 愛知淑徳大学人間情報学部 mritoh@asu.aasa.ac.jp

- ・フリーダムトレイル
- ・マサチューセッツ工科大学（車窓）
- ・ボストン・コモン
- ・ハーバード大学
- ・州議事堂
- ・チャールズリバー（車窓）

この中から特に印象に残っているものについて報告する。

旧州議事堂は1713年に建てられ、80年以上にわたって使用されていた歴史的建造物である。この旧州議事堂のバルコニー（写真1）ではアメリカ独立宣言が群衆に読み上げられている。この旧州議事堂のあたりはボストン茶会事件やボストン大虐殺がおこった場所でもある。

現在使われている州議事堂（写真2）は黄金が目立つ建築物である。また、アメリカ独立戦争の兵士の様子が描かれた史跡がある。



写真1



写真2

市内には、独立戦争の史跡16か所を赤い線で結ぶフリーダムトレイルがある。その一部がボストン・コモンである。現在は公園として市民や観光客出親しまれている。独立戦争の切り札になったレキシントン・コンコードの戦いはここから出発したイギリス兵によって始まった。

ハーバード大学へも訪問することができた。大学図書館（写真3）も大きいものであったが、残念ながら中を見学することはできなかった。敷地は広く美術館やメモリーホールなどが多く立ち並ぶ。ジョン・ハーバード John Harvard 像（写真4）もあり、そのつま先を触ると幸せになれるといわれている。しかし、像のモデルはハーバード自身ではなく像制作時の学生なのである。



写真3

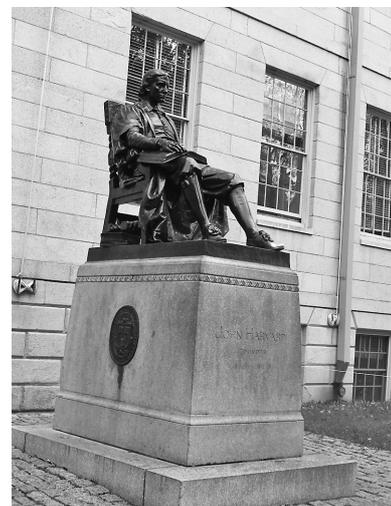


写真4

2. ボストン公共図書館

今回の研修では日程の関係上、図書館内の美術品および建築に関する説明を主とした見学であった。ボストン公共図書館 Boston Public Library（以下、BPL）は1848年に建てられたアメリカ最古の公共図書館である。この図書館は市立図書館であるが、州のみならず一部は個人からの寄付金などを受けて運営されている。入口にはそれを象徴するブロンズ像が建てられている。旧館ロビーは空間を広く取るために天井がアーチ状になっており、その表面はモザイク画でうめつくされている。また歴代のアメリカ大統領の名前が刻まれている。この空間は、人を招き入れることを重視した雰囲気になっている。入口正面の階段には大理石で作られた2頭のライオンの像がある。ライオンが置かれている土台も同じ大理石で作られている。

旧館の2階ではアメリカの画家エドウィン・オースティン・アビー Edwin Austin Abbey の壁画を見ることができる。「聖杯の探求」という宗教画である（写真5）。ここは閉架式の時代に貸出し場所だった部屋で、司書が資料を書庫から取ってくる間、利用者が物思いにふける場所であった。



写真5

3階の廊下はサージェント・ホールと呼ばれ、アメリカ人画家ジョン・シンガー・サージェント John Singer Sargent の壁画を見ることができる（写真6）。この壁画は1891年に制作が開始された。キリストやモーゼが対面するように描かれ、赤色と金色が印象的な宗教画である。

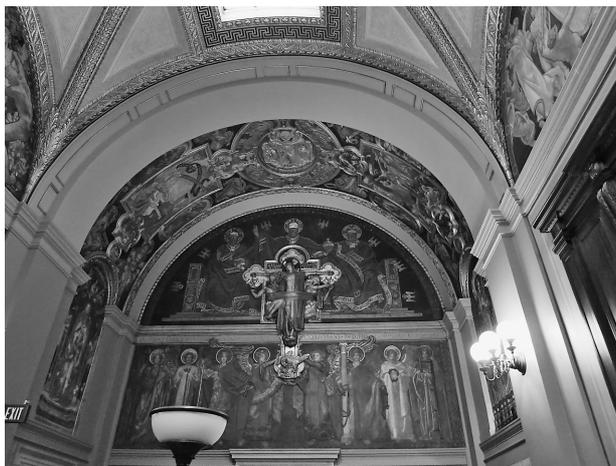


写真6

アメリカ最古の公共図書館を見学して、日本の公共図書館と違う何かを感じることができた。本を借りる・読書するという場所だけではなく、美術館のような感覚で行ける場所なのであろう。機能的な施設ではないが、物思いにふける場所でもあるのではないかと思う。このことを象徴するように、哲学から科学技術の発展まで

を描いた絵画が、階段から2階の廊下に描かれていた(写真7, 8)。その内容は、哲学や歴史、歌、詩、物理や化学など、人と情報、コミュニケーションに関するものである。



写真7



写真8

3. ボストン3日目

3日目はボストン北部へのツアー(図1:セーレム, レキシントン, コンコード)による研修であった。

ボストン北部は、魔女狩りや魔女裁判, レキシントン・コンコードの戦いといったアメリカ独立戦争の舞台となった歴史的な地域である。魔女博物館, 七破風の家, エマソンの家, 旧牧師館, ウォルデン湖, オールドノース橋, オーチャードハウスを見学した。



図1

セーレムの魔女博物館へ向かう道中では、レキシントンの街並を見ることができた。魔女博物館では、17世紀に実際に行われた魔女狩りや魔女裁判を、蠟人形の展示と音声解説で学ぶことができる。なぜ魔女狩りが発生したのか、その原因となった少女たちの遊びや心身を病みパニックに陥る人々、裁判や牢獄の様子がリアリティのある蠟人形で表現されていた。照明を落とした部屋の周囲を蠟人形が囲み、音声解説に合わせてシーンごとに人形がライトアップされる。部屋の中央に座り、人形を見上げる形で解説を聞くと、その不気味さや恐

怖が伝わってきた。

次に向かった七破風の家（写真9）は、作家ナサニエル・ホーソン Nathaniel Hawthorne の代表作『七破風の屋敷』のモデルとなった家である。七破風とは七つの切妻屋根のことである。建物自体は17世紀に造られたものであり、増築を重ねたことで現在の様な七破風となっている。建物の中には、侍女が利用するための隠し通路や扉、細い階段などがたくさんあり興味深い構造になっている。また、敷地内には七破風の家他にホーソンの生家を始めとする歴史的な建物が並んでおり、自由に見学することができる。



写真9

コンコードは、19世紀に多くのアメリカ文学の作家たちが暮らした町である。ここでは、アメリカの超絶主義を唱えた哲学者であり作家でもあるラルフ・ワルド・エマソン Ralph Waldo Emerson が暮らした家や、ホーソンが暮らし、エマソンが『自然論』を執筆した旧牧師館を見学した。建物や家具は当時使われていたものがそのまま展示されており、当時の暮らしや防火対策などの話を伺うことができた。また、ウォルデン湖の近くには、エマソンの教えを実行したヘンリー・デイヴィッド・ソロー Henry David Thoreau が暮らした小屋が再建されている。



写真10

オールドノース橋は独立戦争の始まりの場所である。この橋を挟んでアメリカ軍とイギリス軍が衝突した。この戦争では、普段は農民として暮らしている者も兵士として加わった。橋の袂には、号令を聞けば農具を棄て1分で兵士となることを表現した「ミニット・マン」の像（写真10）が建てられている。

最後に訪れたオーチャードハウス（写真11）は、『若草物語』の作者ルイザ・メイ・オルコット Louisa May Alcott とその一家が住み、物語のモデルにもなっている家である。現在は博物館となっている。館内は英語ガイドツアーで見学し、若草物語に登場するマーチ家と実在のオルコット家を関連づけた説明を聞くことができ

た。また、実際にオルコットが執筆に使った机や、各所に飾られているオルコット家の写真や絵などを見ることで若草物語により親しみを持つことができた。室内の本棚には、若草物語やオルコットに関する書籍が並べられているが、その中に日本でも親しまれている講談社青い鳥文庫の版があったのが印象的であった。



写真 11

4. アメリカン大学音楽図書館館長松岡伸枝さんへのインタビュー

4日目の夜、ワシントンD.C.のチャイナタウンで、アメリカン大学音楽図書館館長の松岡伸枝さんと友人のUnited States Marine Band Libraryに勤務しているJane Crossさんと夕食を交えながらインタビューをさせていただいた。アメリカン大学の音楽図書館では、楽譜12万冊、CD1万点、音楽書15万冊の蔵書があり、大学院を含め7000人（そのうち学部学生5000人）の学生に利用されている。職員は、松岡さんを除くと1人の専任司書と6人のパートの学生で構成されている。

以下はそのインタビューでお話ししていただいた内容である。

アメリカの司書資格

アメリカでは司書資格を取得するために大学院で勉強する必要がある。大学図書館で働く司書の仕組みは、大学で学んだ専門分野の知識を持って、その分野の専門司書として働くことである。主題専門知識を持つことで、選書や膨大な量のデータベースから専門分野のデータベースに精通することができる。

選書

選書は、ユーザを知らないとできないため、カリキュラムや教員について把握することが重要な仕事となる。また、教員からどういう資料が欲しいか書店に要求するとき（継続発注など）は、日本では条件の概要を出すだけのことが多いが、アメリカでは詳細な条件を提示して選書を依頼する。要求に合致していないが近いものがあれば、書店から送ってもらい選書を行う。

大学図書館司書

日本では、大学図書館の司書は事務職員の身分であるため授業に関わることはない。これに対し、アメリカの大学図書館の司書は、教授と同じ資格を持っており司書が授業に入り込むことができ、教員と授業の橋渡しをする役割を持っている。司書一人ひとりがオフィスアワーを持ちメールでの予約により学生の質問に答えることもある。しかし、司書が教員と対等な立場であることを、教員に示すことが大変であるという苦勞もある。

電子図書

アメリカの大学図書館ではe-bookの利用が盛んであり、タブレットの貸し出しを行っている。教科書のタブレット化が進んでおり、金銭的に余裕のない学生もいつでも利用できるようになっている。

公共図書館司書

公共図書館で働く場合、州によって求められる資質は異なる。例えばカリフォルニア州では、他国の言葉が話せるということが求められる資質の一つである。また、公共図書館の司書は本が好きであることが大切で、〇〇に似た本を探すこともできるリーダーズアドバイスというデータベースもあるくらいだ。公共図書館で必要なことは、コミュニティに貢献することである。利用者に知識を知ってもらおうと同時に喜んでもらい、図書館を利用してもらうなくてはいけない。予算確保のためには図書館を利用してもらうなくてはいけないため、図書館員は積極的に活動している。

感想

司書として大切なことは、その学問の専門知識と人とのつながりである。特に人とのつながりはチームとして働くために必要なことである。また、アメリカでは、司書は学会や協議会に所属することを強く求められるため、自分の知識を広げるために発表する機会があり、互いに学びあい知識の共有をすることができる。自ら知識を身につけ発表することでキャリアを伸ばしていくことが可能である。インタビューをさせていただいて、日本では司書の研修会は多いと聞かすが、自ら発表して知識を深めていくというアメリカの司書と比べると受身的であるのではないかといった違いを感じた。

5. 米国議会図書館

米国議会図書館 Library of Congress (以下、LC) は、アメリカの国立図書館である。LC は日本の国立国会図書館のモデルとなったもので、サービスの対象者として議員、市民の順に重きを置いている。閉架書庫で LC 分類法を使用し、主題件名標目を資料に付けることで、目的の資料との関連が明示できるようになっている。ライブラリコレクションとして約 1 億 5 千点の絵画、地図、楽譜などを収蔵しており、図書、図書以外の形態に分類して収蔵している。1 日 2 万タイトルの新刊資料が送られ、利用者にとって LC で所蔵することに對する意義があるものとないものを区別し、意義があるものだけを収蔵している。意義がないとされたものは、美術館や博物館や他の専門図書館等に売却するか寄贈する形を取っている。また 1875 年から、日本の国立国会図書館の資料を LC へ移送している。理由は、日本の地形変動によって生じる地震や災害などから資料を保護するためである。加えて、LC は基本的に、「利用者を待つのではなく、利用者にとんどん向かっていく」という主体的な姿勢を取っており、これは日本の多くの図書館とは大きく異なる点である。日本の図書館はあくまで保守的な姿勢を取っている面があるように思われる。

一般の利用者が見学できる範囲では、図書館とは思えないほど壁画や彫刻などで豪華に装飾され、きらびやかな雰囲気を纏う。一方で、職員が働く図書館の頭脳ともいえるべき部分は、天井をパイプが何本も通る地下道でつながっており、オフィスビルのような様相である。LC では職員が複数の部門に分かれて働いている。元法学部門目録担当者菅井さんのガイドのもと、以下の場所を見学した。

- ・ Children's Literature Center (こどもの読書サポート)
- ・ Asian Reading Room (アジア部門の本を閲覧)
- ・ サロンスペース (現在は会議室などとして利用)
- ・ Bibles Gallery (『ゲーテンベルグ聖書』などの貴重な所蔵品を展示)
- ・ Main Reading Room (研究目的のために使用)
- ・ オフィススペース (法務部門)

その中でも特に印象に残ったものを下記に報告する。

Children's Literature Center は、LC 館長自らが「こどものうちからの読書習慣の必要性」を訴えていることもあり、力が入った空間のように感じた。絵本の絵やぬりえが飾られ、入った瞬間にここがこどものためのスペースであることが分かる。入って真正面にレファレンスカウンターがあるのは、入ってきたこどもを確認でき、中で遊んでいるこどもにも気を配ることのできる位置であるからだろう。

また、Main Reading Room (写真 12) は、1 階から 2 階まで吹き抜けとなった八角形の広いスペースの中央に机が並べられ、その周囲を本棚が囲っている構造となっている。蔵書の様子までは窺えなかったが、ここもブロンズ像や細やかな装飾に彩られ、厳かな雰囲気を漂わせていた。日本の国立国会図書館はこの LC をモデルとして作られた。しかし、内装については機能性を重視した造りになっているため、まったく異なった施設のように感じられた。



写真 12

最後に見学した菅井さんのオフィススペース (写真 13) は、ジェームズ・マディソン記念館にある。今年法学部門を退職され、現在は非常勤職員として勤務している菅井さんの机も見せてもらったが、膨大な資料に覆われており、仕事の大変さを物語っているようだった。これは職員が減少しており、日本語が理解できる人が少なくなってしまったためである。滅多に見ることのできない LC の裏側も見ることができ、貴重な体験ができたと思う。



写真 13

6. 米国議会図書館アジア部門 ナカハラマリさんとのインタビュー

LCアジア部門レファレンススペシャリストナカハラマリさんに1時間あまりインタビューさせていただいた。

以下は、インタビューの中でいくつか質問させていただいた内容である。

OPAC

今後のLCについて、デジタル媒体に追いついていない点、OPACの改善などがあげられ、将来的にOPACを資料のタイトル、著者から検索できるだけでなく、抄録のキーワードからでも検索できるようにしたい。

ボランティア

ボランティアの導入についてお聞きしたところ、LCには定年退職がなく、自分で退職していく形を取っている。しかし、予算削減のため一度に多くの従業員が退職し、業務に支障がでる事態となっている。そのため、退職した元従業員をボランティアとして手伝いをお願いして、どうにか業務を遂行している。

サービス

LCで進めているサービスについてお聞きしたところ、新しいサービスは始めておらず、レファレンスサービスをもっと多くの利用者に利用していただきたいという考えの下、レファレンスサービスをバーチャル化するサービスを行っている。

連携

美術館や博物館などの図書館同種施設との連携をしているかについては、テーマ展示などを連携して行っていると話された。例えば、最近ワシントンD.C.で行われた桜の植樹イベントを行ったり、美術館や博物館とカタログの交換をしたりしている。

感想

LCは議会図書館として進んでいるという印象を持たれているが、実際は現状を維持することで精一杯で、なかなか先進的な面に取り組めていないことが分かった。

7. ワシントンD.C. 研修

研修1日目は、アーリントン国立墓地、リンカーン記念館、車窓よりホワイトハウスやスミソニアン協会の建物が並ぶエリアを視察した。市内視察の後はチャイナタウンに移動し、現地の司書との夕食会を持った（4章参照）。

アーリントン墓地は、軍人関係者が眠る国立墓地であり、1963年凶弾に倒れたジョン・F・ケネディ John Fitzgerald Kennedy 大統領の墓があることで有名である。ケネディ大統領の墓は、白い小さな墓石が無数に並ぶ小高い丘の頂上付近にあり、墓を取り囲むよう就任式のスピーチの内容が彫られた石碑が設置してあった。アーリントン墓地の墓石には階級、死因、血縁関係などが書かれているものもあり、日本との文化の違いを感じた。

続いてリンカーン記念堂（写真14）を見学した。リンカーン記念堂はギリシア建築の建物であり、その中に巨大なエイブラハム・リンカーン Abraham Lincoln 大統領の坐像が設置されている。リンカーン像の目線はワシントンD.C.の街を見下ろしており、街を守っているような印象を受けた。また、1963年のワシントンD.C. 大行進の際キング牧師が演説を行った場所に「I have a dream」の記念碑が彫られていたり、アメリカ全州の名が彫られた記念碑が設置されていたりして、アメリカの歩んできた歴史を感じられる場所であった。その後は車窓により、ワシントンD.C. 市内を見学した後、ホワイトハウス付近で一旦下車し外観の見学を行った。その後車窓よりスミソニアン協会やアメリカの行政機関を見学した。



写真 14

研修2日目は、国会議事堂、LC（5章参照）を見学した後、自由行動であった。国会議事堂（写真15）では館内の見学ツアーに参加した。ツアーでは国会議事堂内の装飾の意味や、壁に描かれた絵画の意味を伺った。中でもアメリカを代表する偉人たちの彫刻が並ぶ大広間は圧巻であった。議事堂の絵画の中には身分差別など負の歴史の部分もしっかりと描かれており、功績の部分のみ見せるという形ではない点が印象的であった。



写真 15

LCの視察後、スミソニアン協会の一つである国立自然史博物館（写真16）を鑑賞した。自然史博物館は化石や陸上生物、鉱物など様々なテーマごとに展示室が分かれており、自分の鑑賞したい展示から自由に鑑賞で



写真 16

きるようになっていた。はく製や模型は自然の姿をそのままとらえたような展示の仕方がされていたり、骨からその人物の死因を特定するという展示が行われていたりして非常に興味深かった。各展示室にそれぞれ目玉展示物があるということも特徴的であり、どのエリアにも見学者がほぼ均等に分散していた点が印象的であった。また、自身で見学したい展示物を自由に選択できるという点がとてもよい博物館であると感じた。

8. 研修を終えての感想

研修を通じて、日本とアメリカの文化の違いを肌で感じることができ、貴重な経験となった。食事や買い物、交通事情など日本とは異なる習慣に戸惑いを感じることも多かった。また、図書館についてお話を伺ったり、実際に図書館の見学をしたりしたことにより、日本の図書館の抱える課題や両国の図書館の類似点が見えるようになった。

アメリカ文化の発展の地であるボストン、ワシントン D.C. を訪れ、歴史的な建物や有名な文豪の歴史を知ることにより、現在のアメリカ文化がどのように形成されていったのか理解することができた。今回の研修は、自分自身の考え方に変化を与えたものであった。